教　育　研　究　業　績

氏名：崔　智喜
学位：博士（学術）

研究分野	研究内容のキーワード
政治学（国際関係論）	朝鮮半島をめぐる国際政治、日韓関係、日朝関係、北朝鮮の外交、日本の外交

主要担当授業科目	グローバルスタディーズ入門（オムニバス）、日韓比較文化論、留学前ゼミナール、留学後ゼミナール、韓国語ディスカッション、時事韓国語、観光韓国語、韓国語会話１、韓国語会話２

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
①マルチメディア資料を用いた授業	2024年4月 ～現在	東京成徳大学にて、韓国語や朝鮮半島情勢に関連する授業を担当しているが、韓国語会話では、世宗学堂出版のテキストを基にしつつ、YouTubeでの関連動画、音声ファイルを積極的に活用している。時事韓国語や韓国語ディスカッションでも、韓国放送局のニュース、韓国国策研究所が作成した動画を授業に取り入れている。朝鮮半島情勢関連授業でも同様に映像資料を適宜導入し、理解を深めるために努力している。 目白大学、津田塾大学にて、インターネット記事や関連する映像資料を授業で用いた。
②パワーポイントの活用	2024年4月 ～現在	東京成徳大学および目白大学における授業で、パワーポイントやレジュメ資料を活用した。
③研究会および講演会の企画・開催	2024年7月 ～2025年3月	東京大学韓国学研究センターにて、朝鮮半島地域研究をテーマに研究者、教員、メディア関係者などを中心とする研究会・講演会を開いた。学部生や大学院生だけではなく、一般参加者も交え、意見交換を行った。
④専門家の招聘	2025年4月 ～2026年3月	目白大学にて、日韓翻訳演習および韓日翻訳演習の授業で、現役で活躍している翻訳家、ソウル特派員をお招きし、日本語と韓国語の翻訳について具体的な経験談を共有した。
⑤オフィス・アワーでの学生個別相談	2026年4月 ～現在	東京成徳大学にて、毎週月曜日に設けられているオフィス・アワーに、学生が積極的に研究室に足を運べるようアポイントメントなしで気軽に訪れることを促している。実際に4月の第1回目の授業から毎週学生らが研究室を訪れ、勉強のアドバイスや悩みなどを相談する機会になっている。
⑥正課外教育活動	2026年4月 ～現在	東京成徳大学にて、研究日で授業のない日にも学生の身体・精神面における相談に乗っている。
⑦Google「クラスルーム」及び MS「Teams」の活用	2024年4月 ～現在	津田塾大学では、Google「クラスルーム」を通じて課題や試験の前後に学生と双方向でコミュニケーションが取れる形で授業を実施した。東京成徳大学では、MS「Teams」を通じて、韓国留学中の学生に課題を付与し、フィードバックを行い、遠距離における指導に活用している。
２　作成した教科書，教材		
①東京大学大学院地域文化研究専攻発行『年報地域文化研究』第26号、第27号	2023年3月、 2024年3月	東京大学が発行する雑誌の編集委員を約1年間務め、雑誌編集や発行に関する経験を有している。
②日韓翻訳演習	2025年4月	目白大学にて、15回分（90分／1回）の語学授業用に、パワーポイントや活動用紙などを用いて資料を作成した。
③韓日翻訳演習	2025年4月	目白大学にて、15回分（90分／1回）の語学授業用に、パワーポイントや活動用紙などを用いて資料を作成した。
④時事韓国語	2026年4月	東京成徳大学にて、14回分（100分／1回）の語学授業用に、最新の政治・経済・社会など各分野におけるニュース映像やスクリプトを使い、資料を作成した。

⑤韓国語ディスカッション	2026 年 4 月	東京成徳大学にて、14 回分（100 分／1 回）の語学授業用に、参加型を意識し、韓国の様々な社会問題をテーマに、日本との比較を交えながら意見を述べるための資料を作成した。
⑥観光韓国語	2026 年 4 月	東京成徳大学にて、14 回分（100 分／1 回）の語学授業用に、観光立国日本の魅力を韓国語で流ちょうに説明できるよう意識し、資料を作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
①東京大学韓国学研究センター	2024 年 7 月 ～2025 年 3 月	東京大学韓国学研究センターの特任助教として、学部生や大学院生と共に韓国・朝鮮関連研究事業に携わった。イベントを企画・実施し、会計関連業務まで担い、少人数体制のセンター業務に積極的に取り組み、学内からも信頼を得た。
②津田塾大学	2024 年 4 月 ～2026 年 3 月	授業を始めた 2024 年度には、3 つのクラスで約 60 名の受講生と共に充実した授業を行った。当時、韓国語・朝鮮語講師として、学生のアンケートで好意的な評価を受けると共に、同言語の別のクラスを担当する先生から、学生の反応が良いという口頭での評価をいただいた。また、1 年間の授業が終了し、複数の学生からメールなどを通じて、楽しく韓国語の勉強ができたことを感想として受け取った。 2 年目の 2025 年度には､4 つのクラスで受講生が約 100 名に増えた｡2024 年度に講読Ⅱを受講していた学生から多数が、講読Ⅲの授業を続けて受講した。なお、「韓国語講読２・３」（全 4 科目）において、全ての質問項目で大学の平均を上回る評価をもらった。自由回答では、これまで気になっていた文法などについて丁寧な説明を行い、理解を深めることができたことなど肯定的なコメントをもらった。
③目白大学	2025 年 4 月 ～2026 年 3 月	2024 年度前期および後期に担当した「韓国語会話１・２」「日韓翻訳演習」「韓日翻訳演習」（全 4 科目）において、全ての質問項目で満点に近い評価をもらった。自由回答では、丁寧で優しい説明などと肯定的なコメントをもらった。また、他の非常勤講師から、初めての非常勤講師として、韓国語学科の専攻授業を 3 コマも担当する事例は珍しいという言葉をいただいた。韓国語学科の学科長からも、期待の言葉をいただいた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
①東アジア貿易研究会 嘱託職員	2022 年 2 月 ～2023 年 3 月	日本東アジア貿易研究会は、日本と北朝鮮の経済関係の研究・調査、実務を担っており、研究会が所蔵している資料の整理などを行った。
②東京大学大学院地域文化研究専攻発行『年報地域文化研究』編集委員	2022 年 8 月 ～2024 年 3 月	東京大学にて博士課程中 2 年間、東京大学大学院地域文化研究専攻発行の『年報地域文化研究』（第 26 号、第 27 号）の編集委員を務めた。
③韓国語教員免許の取得	2024 年 10 月	韓国語教員資格 2 級を取得し、外国語としての韓国語教育者としての専門性を極め、韓国語教育に生かしている。
④学術研究員	2025 年 5 月 ～2026 年 3 月	東京大学総合文化研究科にて研究助成などを受けながら「『日朝関係』を切り口とした日本と朝鮮半島の関係」をテーマとして研究に励んだ。
⑤東京成徳大学国際学部国際学科教務委員会留学国際交流担当教員	2026 年 4 月 ～現在	韓国留学担当教員として、以下のような関連企画業務を担当 a. 留学前ゼミナール・留学後ゼミナール ：韓国留学に向けた 1 年生を対象とした授業および留学から戻ってきた 2 年生を対象とした授業を企画・実施 b. 留学関連オリエンテーション ：1 年生向けの留学オリエンテーション、渡航前オリエンテーションなど c. 留学課題の実施 d. 心身の問題を抱える学生に対する留学準備個別指導 e. 留学先大学によるオンライン説明会の実施 f. 韓国現地巡回指導 g. 留学中の学生に対する危機管理
５　その他 大光中学校日本語講師（韓国）	2006 年 3 月 ～2007 年 1 月	高麗大学大学院修士課程に在籍中、大光中学校の放課後授業の一環として設けられていた日本語授業にて、講師を務めた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 韓国語教員資格２級	 2024 年 10 月 25 日	 韓国国立国語院・文化体育観光部など政府が管轄する資格である「韓国語教員資格２級」（登録番号：2024－22－4506）を取得し、韓国語教育に生かしている。2 級は、韓国語教育を専攻として大学を卒業した者と同等の資格であり、1,200 時間の韓国語講義経験に相当する。
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ①日本・韓国メディア勤務 a.時事通信社ソウル支局（日） b.文化日報（韓） c.亜州経済新聞（韓） d.プレスマン（韓） ②時事通信社編集優良賞	 2008 年 8 月 ～2026 年 3 月 2015 年 4 月	 以下のように、韓国および日本メディアにおいて、約 18 年間勤務した経験を有している。 a.時事通信社ソウル支局（日） b.文化日報（韓） c.亜州経済新聞（韓） d.プレスマン（韓） 日本時事通信ソウル支局に、約 8 年間記者として勤めた。その後、日本でも韓国メディアの通信員として働いた。取材分野は、政治外交をはじめ、文化、スポーツ、各種事件など多岐にわたる。日本メディアの一員として、韓国のことを日本に伝えたり、韓国メディアの一員として、日本のことを韓国に伝えたりする経験を積むことで、両国関係を肌で感じ取り、理解を深めることができた。なお、多様な人々に出会い、研究や教育にも大切な資産になっている。 時事通信社編集局から、編集優良賞を受賞。取材、記事作成などを評価され、授与された。具体的には、駐韓米国大使襲撃事件で、大使が講演する予定であったセミナーに足を運んで事件に遭遇し、速報・記事・写真で他社に差を付けた。
4　その他 （外部研究費の取得状況） ①韓国学中央研究院・海外韓国学中核大学育成事業 大学院研究奨学生 ②朝鮮奨学会大学・大学院奨学金 ③国際政治学会翻訳助成 ④松下幸之助記念志財団研究助成 ⑤第 12 回法政大学出版局学術図書刊行助成	 2019 年 4 月 ～2020 年 3 月 2020 年 4 月 ～2022 年 3 月 2024 年 9 月 2025 年 8 月 2025 年 10 月	 「1970年代前半の日朝関係について―北朝鮮はなぜ日本に接近したのか―」という研究テーマで、東京大学大学院修士課程在学中、1年間奨学金をいただいた。 「冷戦期における日朝関係研究」というテーマで、東京大学大学院博士課程在学中、2年間奨学金をいただいた。 国際政治学会の翻訳助成を受け、「Diplomacy with the DPRK during the Nakasone administration: With a focus on two-track diplomacy at the governmental and nongovernmental levels」というタイトルで論文を刊行した。 松下幸之助財団から、「「日朝関係」を切り口とした朝鮮半島と日本の関係」という研究テーマで助成を受けた。 法政大学出版局にて出版助成を受け、今年秋に博士論文の出版を予定している。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） （学術論文） 1　한일　양국어의　'일어문' 대조연구（韓日両国語の「一語文」対照研究）	単	2008 年 2 月	고려대학교대학원 （高麗大学大学院） 修士学位論文	（ページ数）130 （概要） 日本語と韓国語を対象とした比較・対象研究が活発に行われている中、これまで研究対象になっていなかった「一語文」、つまり一つの単語で意味が成り立つ文について対照研究を行った。品詞ごとの「一語文」出現頻度や発話状況などについて調査した。
2　'일본인　납북　문제' 의 국내정치와　일본　신문의　보도 프레임 변화－요미우리・ 아사히 신문의 보도를　중심으로（「日本人拉致問題」の国内政治と日本新聞の報道フレームの変化－読売・朝日新聞の報道を中心に	単	2017 年 2 月	북한대학원대학교 (北韓大学院大学) 修士学位論文	（ページ数）105 （概要） 日本社会において、北朝鮮による日本人拉致問題が国内政治問題化した過程を探った。主に、ワイドショーなどテレビの過熱報道、そして新聞報道のフレーム変化など、マスメディアの動きに焦点を当て、報道が世論などに与えた影響を分析した。2002 年小泉訪朝による平壌宣言が色あせ、拉致問題だけが独り歩きする過程を明らかにした。
3　冷戦変容期における日朝関係の展開－国際政治と経済交流に焦点を当てて－	単	2020 年 3 月	東京大学大学院総合文化研究科 修士学位論文	（ページ数）94 （概要） 1970 年代冷戦変容期を中心に、日朝関係を巡って、 国際関係に連動する力学と、日朝二国間で作用した力学が、どのような相関関係や特質を持って働いていたのかを考察した。70 年代初頭、冷戦の変容という国際情勢の激変の中、日本と北朝鮮は、短い間ではありながら、政治関係の後退が経済関係の深化を促すという、逆説的な動きをみせた。
4　（査読付）冷戦変容期における日朝関係の展開－国際政治と経済交流に焦点を当てて－	単	2020 年 12 月	現代韓国朝鮮学会 『現代韓国朝鮮研究』第 20 号	（ページ数）20 （概要） 1970 年代冷戦変容期を中心に、日朝関係を巡って、 国際関係に連動する力学と、日朝二国間で作用した力学が、どのような相関関係や特質を持って働いていたのかを考察した。70 年代初頭、冷戦の変容という国際情勢の激変の中、日本と北朝鮮は、 短い間ではありながら、政治関係の後退が経済関係の深化を促すという、逆説的な動きをみせた。
5　（査読付）1980 年代北朝鮮の対日政治的接近に関する研究－1984 年日朝漁 業協定再締結から 85 年川勝訪朝までを中心に－	単	2023 年 1 月	アジア政経学会 『アジア研究』69 巻	（ページ数）21 （概要） 1980 年代北朝鮮の対日外交に焦点を合わせ、対日政治的関係改善の努力が顕著になる 1984-85 年を中心に、その具体的な動きを実証的に検証した。北朝鮮が韓国の北方政策の成功により外交姿勢を変えざるを得ず、90 年代に入ってから

				日本との政治的関係改善に乗り出したという既存の観点に、新たな解釈を加え、北朝鮮がこの時期、韓国の北方外交に対応する形で、自国なりの「南方政策」を行っていたことを主張した。
6　（査読付）中曽根政権期の対北朝鮮外交に関する研究－政府及び非政府レベルの２トラック外交に焦点を当てて－	単	2023年3月	国際政治学会 『国際政治』210号	（ページ数）16 （概要） 中曽根訪韓後の1983年1月から、水面下での日朝政府間協議が始まる86年1月の間を対象に、日本が行った対北朝鮮外交を分析した。90年代の日本の対北朝鮮外交は、80年代の中曽根政権期、政府及び非政府レベルで相互補完的に行われた環境整備の上に成り立っていたことを、実証的に検証した。
7　中曽根政権期における日朝関係－東アジア国際関係と日朝二国間関係の交錯－	単	2024年4月	東京大学大学院 総合文化研究科 博士学位論文	（ページ数）398 （概要） 1980 年代中曽根康弘政権期における日朝関係を分析した博士学位論文。中曽根政権期を、新冷戦という制約の中で、日本が北朝鮮との政治関係を開拓していくための環境醸成を行った時期とみて、その対北朝鮮外交を実証的に検討した。さらに、この時期北朝鮮においても、日本に対する政治的接近の動きが著しく示されたことに注目し、その姿をできる限り可視化することに成功した。
8 （査読付)Diplomacy with the DPRK during the Nakasone administration: With a focus on two-track diplomacy at the governmental and nongovernmental Levels	単	2024年10月	International Relations of the Asia-Pacific, University of Oxford	前述の『国際政治』210 号にて掲載された論文を英文化し、イギリスの University of Oxford にて出版。
9 （査読付）1980 年代韓国のクロス承認構想の変遷と日本の対朝鮮半島外交－多国間の緊張緩和の枠組みと日朝二国間関係の交錯－	単	2024年12月	現代韓国朝鮮学会 『現代韓国朝鮮研究』第24号	（ページ数）20 （概要） 1980 年代韓国が水面下で進めていたクロス承認構想と日本の関わりを分析することで、韓国において盧泰愚（ノテウ）政権で花開く北方外交の萌芽がこの時期に生まれたことを示すと共に、中曽根政権がこの時期に行った対朝鮮半島外交が、90年代初めの金丸訪朝及び日朝国交正常化交渉への環境醸成になっていたことを明らかにした。
10 （査読付）「第18富士山丸事件からみる冷戦終焉前後の日朝関係:事件発生から船員帰還による解決までを辿る」	単	2025年6月	アジア政経学会 『アジア研究』 第71巻(1-2号合併号)	（ページ数）19 （概要） 1990年代の金丸訪朝から始まる一連の動きは、冷戦崩壊や韓国の対中ソ外交など周辺情勢の変化による後発的なものというよりは、80年代中曽根康弘政権期、日朝の間の度重なる懸案協議を経た上で現れたものであることを明らかにした。このような事前作業があったからこそ、冷戦が終結した後、比較的スムーズに日朝の間で

				国交正常化協議が開始できたことを主張した。そのために、83年12月に起きた「第18富士山丸」事件を巡る日朝の動きを主な分析対象とした。
（雑誌・コラムなど） 1　日本国際政治学会第16回奨励賞受賞の言葉		2023年11月	日本国際政治学会	（概要） 受賞論文『中曽根政権期の対北朝鮮外交に関する研究－政府及び非政府レベルの２トラック外交に焦点を当ててー』を紹介すると共に、指導・審査に携わってくださった先生方への感謝の気持ちを述べ、学会のホームページやニュースレターに掲載された。
2　（招待有り）「敵か味方か」を越えた中曽根政権の対朝鮮半島外交		2026年1月	中曽根平和研究所 『NPI Quarterly』 第17巻(第1号)	（概要） 公益財団法人中曽根康弘平和研究所の奨励賞受賞者として、研究内容や今後の抱負を紹介したものが、研究所が発刊する雑誌に掲載された。
3　（招待有り）書店から見えた日韓関係の十年		2026年3月	『改革者』 2026年3月号	（概要） 2016年渡日後、約10年間、韓国メディア記者、外国人留学生として肌で感じた日韓関係の変遷をコラム形式で執筆した。
4　（招待有り）「青い珊瑚礁」が繋ぐ、昨日と明日の日韓関係		2025年4月	『改革者』 2026年4月号	（概要） 日韓関係が活発な人的・文化的交流を重ね、これまでの政治的葛藤が繰り返される構造から脱皮している現在の様子をコラム形式で執筆した。
5　（招待有り）韓国男性×日本女性 ― 数字が語る新たな潮流		2025年5月	『改革者』 2026年5月号	（概要） 近年の韓国人男性と日本人女性の結婚数の増加という現象を通して、新たな潮流としての日韓関係をコラム形式で執筆した。
6　（招待有り）空席が増える講義室―韓日の地方大学、それぞれの生存戦略		2025年6月	『改革者』 2026年6月号	（概要） 日本の大学で教員として勤め、日韓の間で留学業務を担当しながら感じたことを、コラム形式で描いた。
（講演・口頭発表など）				
1（招待有り）1970年代デタント期における日朝関係について		2019年 6月19日	（名称） 2019年研究助成採択者研究会 （場所） 東京大学駒場キャンパス	（概要） 東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻の研究助成を受けた人を対象とした研究発表会に参加した。1970年代米中デタントが朝鮮半島、中でも日本と北朝鮮に与えた影響を視野に入れながら、両国の間で行われた政治及び経済の動きを史料を基に研究した結果を発表した。
2　冷戦変容期における日朝関係の展開－国際政治と経済交流に焦点を当ててー		2020年 11月21日	（名称） 現代韓国朝鮮学会第21回研究大会	（概要） 東京大学総合文化研究科修士学位論文を基に、冒頭説明20分、討論20分程度の発表を行った。討論者は、日朝関係研究における権威者である

			（場所） オンライン開催	三村光弘教授（新潟県立大学）、朴正鎮教授（津田塾大学）が務め、70年代初頭における日本と朝鮮半島関係について深みのある議論を行った。
3（招待有り）若手研究者発表会－市民和解促進のための日韓歴史問題研究		2024年 7月22日	（名称） 若手研究者発表会－市民和解促進のための日韓歴史問題研究 （場所） 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構韓国学研究センター	（概要） Korea Foundation(KF)の後援を受け、博士学位論文「中曽根政権期における日朝関係 －東アジア国際関係と日朝二国間関係の交錯－」を基に発表会を行った。日本外交史研究の第一線で活躍されている、若月秀和教授（北海学園大学）、李秉哲助教（新潟大学）をコメンテーターとして招き、木宮正史教授（東京大学）の司会の下、2 時間半程度の研究発表会を行った。一般にも公開し、和田春樹名誉教授（東京大学）など、約80名ほどが参加した。
4（招待有 り ）박사논문　발표회: 나카소네 정권기의 북일관계 (博士論文発表会：中曽根政権期における日朝関係)		2025年 2月22日	（名称） 北韓大学院大学校政治・統一専攻月例研究会 （場所） オンライン開催	（概要） 韓国の北朝鮮研究専門機関である北韓大学院大学校政治・統一専攻の辛鍾大(シン・ジョンデ)教授主催の定例研究会に招聘され、博士論文の概要と執筆過程、今後の研究計画などについて発表を行った。
5（招待有り）「2025 KOREA-JAPAN EXPERT FORUM」 hosted by the Ministry of Unification		2025年 4月9日	（名称） 「2025 KOREA-JAPAN EXPERT FORUM」hosted by the Ministry of Unification （場所） ホテルニューオータニ東京16階セミナー室	（概要） 「国際情勢転換期、北朝鮮問題を巡る韓日協力」をテーマに、ロシア・ウクライナ戦争終戦交渉など国際情勢の変化、北朝鮮核問題対応、拉致問題及び北朝鮮人権問題、日韓関係発展方案などについて包括的な会議を行った。金暎浩(キム・ヨンホ)韓国統一部長官をはじめ日韓の朝鮮半島専門家12名が参加し、木宮正史（東京大学）、車斗鉉(チャ・ドゥヒョン、峨山政策研究院)の発表を基に、ラウンドテーブルの形で討論を行った。
6（招待有り）中曽根平和研所内会議講演「中曽根政権期における日朝関係」		2026年 3月30日	（名称） 中曽根平和研究所所内会議 （場所） オンライン開催	（概要） 公益財団法人中曽根康弘平和研究所から奨励賞を受賞し、研究内容を講演する機会を得た。博士論文の中から、主に中曽根政権が政府および非政府レベルで行った対北朝鮮外交を、事例を挙げながら約1時間にわたり発表し、質疑応答の時間を設けた。各分野で著名な研究・実務経験を有する専門家と幅広く意見交換し、韓国の対北朝鮮政策、日韓関係、日朝関係などについて討論した。
（その他）				
A［受賞］ a.慶熙大学優等賞 b.慶熙大学校総長賞 c.時事通信社編集優良賞		2005年4月 2006年2月 2015年4月		慶熙大学在学中、成績優秀及び他の学生の模範となる大学生活を行っていることを評価された。 慶熙大学（外国語大学東アジア語学科群）首席卒業により、卒業式で総長から授与された。 駐韓米国大使襲撃事件で、大使が講演する予定で

				あったセミナーに足を運んで事件に遭遇し、速報・記事・写真で他社に差をつけ、時事通信社編集局から授与された。
d.国際政治学会奨励賞		2023年11月		国際政治学会雑誌『国際政治』に投稿した「中曽根政権期の対北朝鮮外交に関する研究－政府及び非政府レベルの２トラック外交に焦点を当てて－」が学会の評価を受け、奨励賞を受賞した。授賞式では、論文の紹介、研究背景、審査委員及び指導教員に対する感謝の言葉を、スピーチ形式で行った。
e.第 12 回法政大学出版局学術図書刊行助成		2025年10月		博士論文が高く評価され、法政大学出版局の出版助成に採択された。2026年秋に出版を予定している。
f.第21回中曽根康弘賞奨励賞		2025年11月		公益財団法人中曽根康弘平和研究所が、新しい国際秩序の創造、地域経済協力体制の構築、飢餓・貧困の克服、パンデミックや災害への対応及び環境・エネルギー問題など、地球規模の課題に積極果敢に取り組み、かつ、国際的に業績を上げている若い世代を対象に年に 1 回授賞を行っている。これまでの研究、メディア・教育活動などが評価され、第21回奨励賞を受賞した。
B［司会］ ソウル外信記者クラブ（Seoul Foreign Correspondents’ Club）「送年の夜」		2008年 12月	（主管） ソウル外信記者クラブ （後援） 文化体育観光部 （場所） THE PLAZA HOTEL SEOUL	年に１回行われる（ソウル外信記者クラブ主催、文化体育観光部後援）年末イベントにて、The Wall Street Journal 特派員と共に司会を行った。
C［セミナー企画など］ a. 日韓歴史問題の論点を探る－「佐渡島の金山」世界遺産登録を考える」 b. 若手研究会－市民和解促進のための日韓歴史問題研究 c. 日韓の「歴史問題」の論点を探る－「日本メディア」がみた日韓の歴史問題 d. 木宮正史教授退官記念講演「私の朝鮮半島研究の軌跡」		2024年 7月17日 2024年 7月22日 2025年 ２月３日 2025年 3月11日	東京大学韓国学研究センター、韓国国際交流財団（ＫＦ）	東京大学韓国学研究センターにて、韓国政府などからの支援を受け、韓国の歴史、文化、政治、言語などに関する行事を開催した。韓国学研究センター特任助教として、学部生や大学院生と共に韓国・朝鮮関連研究事業に携わる経験ができた。
D［通訳・翻訳］ a. 第26次韓日政策対話 b. 第28次韓日政策対話		2019年 7月4日 ～6日、 奈良 2022年 6月15日 ～17日、 札幌	世宗研究所日本研究センター主催、韓国外交部、日本外務省後援 世宗研究所日本研究センター主催、韓国外交部、日本外務省後援	2019年から、半官半民の「韓日政策対話」、メディア記者が集まる「韓日言論フォーラム」、研究者が集まる「韓日次世代フォーラム」に参加している。主に韓国の民間研究機関「世宗研究所」主催のセ

c. 2023 韓日次世代フォーラム d. 2023 韓日言論フォーラム		2023 年 2 月 1 日 ～3 日、 東京 2023 年 9 月 14 日、 東京	世宗研究所日本研究センター主催 世宗研究所日本研究センター主催、韓国言論振興財団、駐日韓国大使館後援	ミナーに定期的に参加し、日韓関係に携わる各分野の専門家と交流し、意見交換を行っている。報告者の報告内容をまとめ、主催者側に提出するなど、記録業務も担当した。

（注）「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。